『蘇悉地経』にみられる灌頂儀礼について

研究生　駒井　信勝

『蘇悉地羯羅経』（以下『蘇悉地経』）は善無畏三蔵（637-735）によって漢訳された。梵本は残されていないが漢訳三本と蔵訳とがある。チベットのタントラ四分類法では、『蕤呬耶経』・『蘇婆呼童子請問経』・『後禅上品』と共に所作タントラの各部に共通する総タントラに配されている。ここでは、この経典の灌頂儀礼がどのような構造を持ち、また如何なる意義を有するのかについて考察していきたい。

『蘇悉地経』の灌頂は「除一切障大灌頂曼荼羅法品」に説かれる。この品に説かれる灌頂儀礼の一連の流れは以下の如くである。

浄地→曼荼羅作画・瓶配置→曼荼羅供養→三種護摩→瓶加被→灌頂→護摩

そして、瓶水灌頂の箇所をみると、蔵訳では幾つの瓶を用いるか定かではないが、漢訳に従えば四瓶で、二番目と三番目に関しては定まった規定がないようである。最初は軍荼利により加持した瓶を用いて受者の障碍を取り除き、最後は自身の本尊で加持した瓶によって灌頂を行う。しかし、その他の瓶はどうかと言えば、漢訳では「余の二瓶を意に随いて用いよ」と説かれ、蔵訳では「中間に［曼荼羅の］中の［瓶］等によって［灌頂をすべし］」と説かれるのみである。『蘇悉地経』の灌頂儀礼で確かなことは、最初は受者の障碍を取り除く為に軍荼利の瓶によって灌頂されること、そして最後に自身の本尊であるところの瓶によって灌頂されるということである。

上記の通り、瓶水灌頂の所では自身の本尊というように、既に受者の本尊が定まっているように思われる。さらに、投華得仏が『蘇悉地経』には説かれない。このことは、『蘇悉地経』の灌頂は、既に別の灌頂により自身の本尊が決まっているか、或いはそれに準ずる何かしらの方法により予め本尊が決まっているものが行う灌頂であることを予想させる。

この箇所に関して「真言相品第二」の一部を引用すると、

（漢訳）（『大正蔵』18巻　603b）

此の蘇悉地経、若し余の真言法を持して成就せざれば、能く兼ねて此の経の本真言を持すべし。当に速かに成就すべし。三部の中に於て、此の経を王と為す。

（蔵訳）（Toh.No.807　168b）

これ［蘇悉地経］を備えて諸々の真言等に親近すれば、速やかに成就することとなる。これ［蘇悉地経］は、一切の部等の大威力ある明王である。

と説かれている。蔵訳に「若し余の真言法を持して成就せざれば」の一文は見られないが、漢訳・蔵訳共に「能く兼ねて此の経」・「これ［蘇悉地経］を備えて」とある。ここに注目すれば、既に灌頂を受け成就法を修しているが、

未だ悉地を得られない者達が、この『蘇悉地経』によってその悉地を得ると推測出来る。

以上をまとめれば、『蘇悉地経』の灌頂は既に他の経典などにより灌頂を受けた者の修法が成就しない時に、『蘇悉地経』の規則に乗っ取り、自身の本尊によって加持した瓶により灌頂することで成就を得るというものであると言える。